

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	大学病院からの嚥下障害患者に対する訪問診療の実績
演者名	山佳祐子、若杉葉子、戸原玄、中根綾子、村田志乃、水口俊介
所属	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野

目的

東京医科歯科大学歯学部附属病院摂食リハビリテーション外来では、摂食嚥下障害患者に対して訪問診療を行っている。2013 年 7 月から 2014 年 6 月までの 1 年間における訪問診療の実績をまとめ、今後の課題を検討したので報告する。

実践内容

1 年間で診療した総患者数は 253 名、総診療件数は 566 回であった。男性 98 名、女性 155 名、平均年齢は 79.5 ± 16.4 歳 (15 歳～103 歳) であった。患者の所在は、居宅[98 名、323 回]、特養[116 名、167 回]、老健[17 名、26 回]、有料老人ホーム[4 名、16 回]、グループホーム[2 名、3 回]、病院[13 名、20 回]、その他[3 名、11 回]であり、居宅への訪問診療が多い傾向を認めた。居宅訪問診療の依頼元では、医科からが 59 名、歯科からが 26 名で、当科外来通院患者が訪問診療へ移行したケースもあった。医科からの依頼ではパーキンソン症候群や筋疾患、ALS など神経変性疾患の患者が約半数と多いことが特徴的であった。歯科からの依頼では、主治医を介さずに依頼がきていることがあり、その際は初診後に当科より主治医へ診療情報提供を依頼した。また、嚥下改善術や誤嚥防止術などの外科的手段の依頼をしたのは 7 名であった。

実践効果・考察

訪問診療において嚥下障害の専門医として患者と関わる上で、主治医との連携は必須である。また、多職種との連携も重要である。高齢化が進行していること、患者は病院から在宅・施設に戻ること、嚥下障害は継続したフォローが必要であることから、訪問診療の必要性は今後も高まることが予測される。いかに患者に関わる人たちを引き入れ、情報を共有し、相互にフォローする関係を構築するかが今後の課題であると考ええる。